



ア
メ
リ
カ
童
話
か
ら

11

お友だち

松 原 至 大

ピーター君はお父さんのお仕ごとがお休みの日を、森のお家で送ることになりました。久しぶりで行く森のお家、ピーター君はもちろんのこと、お父さんもお母さんもうそいそとお支度をなさいました。

森は、とても大きな森でした。小さなピーター君が、一層小さくでもなつたように思わせるほどでした。

「お家から離れてはいけませんよ。玄關の近くで遊んでいるのですよ。」と、お母さんがおっしゃいました。この森に来て、お母さんも御自分が小さくなつたと思ひになつたのかも知れません。

ピーター君はお母さんのお言葉を守つて、玄關の階段の一番先のところに、ちよこなんと腰をかけて、外を眺めて居ました。階段の左側にはふとい薪がきれいに積んでありました。そのうちに、

「ブルブ、ブルルリツブ、ブルルルリツブ。」という声が聞こえてきました。ピーター君の声などよりは、ずつとずつと小さな声でした。あたりを見まわすと、同じように切つた薪の一番上のところに、小さな動物がいました。脊中に縋しながらひつて、小さな耳をびくびく立てて、羽根のような尾を振っていました。

「おや、君かいと。」ピーター君は思わず首をさしのべました。小さな動物は、片々かたかたの耳をぴんと立てました。

「ブルブ、ブルブ、ブルルブ。」と言つて、ピーター君の方へそろそろと寄つてきました。そこへお母さんがピーター君を呼びに来ましたので、その動物はまた薪の間にかくれてしまいました。

その日から毎朝ビーター君が、玄関の階段のところに一人でいると、このチツビーが現れてきて、お話をしました。そのうちにビーター君は、トーストのかけらをやるようになりました。チツビーはそれを頼いつばいに押しこんで、薪の間にかけに行きました。チツビーは、どんなに雷のはげしい時でも、風が強く吹く日でも、一日として来ない日はありませんでした。このチツビーがこわいのは、自分が住んでいる薪のところに時々出てくる大人おとなの足だけでした。なにかその薪の下に、大切なものでもかくしているようでした。

毎朝お父さんはお食事の前に、その薪を持つて行つて、お部屋のストーブにお入れになりました。それでチツビーのお家は、毎朝小さくなりました。とうとう薪が四本しが、残らなくなつてしまいました。ビーター君は、チツビーの困っている様子が、目に見えるのでした。その日の朝は、いつも元気に聞こえる「ブルブ、ブルルリッブ。」も聞こえませんでした。そのかわりに、チツビーが言ったのは、泣くような「ウウ、ウーラ、ウーラ。」でありました。そう言いながら、残つた薪きりのぐりをかけ廻つていたのでした。ちやうどその薪をとりに来る大きな足を、見張つてもいるように。

けれどその時、ビーター君はそつとチツビーに教えてあげました。

「大丈夫だよ。明日の朝はね、ぼくたちもう帰るんだから。朝が早いので、薪の用はないんだよ。もしあつたって、ぼくが君のお家をこわさせやしないから。」

翌朝ビーター君は、早く起きました。そしてお母さんとお父さんのコートを、いつでも着られるように、用意しました。自分はお顔を洗うと、すぐにコートを着ました。

「今朝もまだ寒いね。火をもやそうか。」と、お父さんがおっしゃいました。ビーター君はここぞとばかりに「寒くありません。お父さん、お寒ければコートをお着になれば。ぼくのように。」と答えました。

「でも、ビーターちゃん、朝のお食事の前には、いつも暖まっただけのもの。」とお母さんがおっしゃいました。「だめですよ、お母さん。外へ出て、ボール投げでもしたら、暖かくなりますよ。」ビーター君がいつもと変つたことを言いますのでお母さんは、

「まあ、どうなさったの。」と、お聞きになりました。

「だつて、チツビーが、チツビーのお家がなくなりかけているんだもの。」ピーター君は一生懸命です。

「まあ、チツビーのことなの。それだつたら、またどこかにお家を探しますよ。私たちも、チツブマンク（縞のあ
る栗鼠のこと、北アメリカにたくさんおりますよ。）のように、どこにでもお家が作れたら、よいでしょうね。」

「だめですよ、お母さん。ぼく、約束をしたんですもの。」ピーター君は、まだ一生懸命です。

「そんなにあなたがおつしやるのなら、私たち、早くお食事をすませて、出発しましょうね。」とお母さんがおつしやいました。

荷物が、自動車の中に運ばれました。やがてお家に、鍵がかけられました。お父さんは自動車の前のところに、水をお入れになりました。

「ぼく、すぐにもどつて来ますよ。」ピーター君はこう言つて、また玄関の階段のところへかけて行きました。そして四本の薪の一番下の横にある小さな穴に、トーストのかけらを入れてやりました。そこは、チツビーのお家の玄関なでした。

チツビーは、首を出して、あたりを眺めました。耳をぴんと立てて、鍵のかかつたお家の方を見ました。もう一つの耳で、自動車のそばに立っている大人の音を聞きました。

「ブルルル、ブルルルルルル。」と、チツビーが始めました。穴の中にいるだれかに、話かけでもするように。

「ブルブ。」と、小さな声がいくつもいつしよになつて、中から答えました。そして四匹のチツブマンクの子供が、中から出て来ました。どの子もまじめな目をして、ピーター君を見てから、トーストのかけらを食べました。

「ああ、これかい、お前が大事に穴の中にかくしておいたのは。」と、ピーター君は思わず言いました。

「ブルブ、ブルブ、ブルブ。」と、またチツビーが言いました。

「ピーター、早くおいで。」お父さんが自動車の中で、お呼びになりました。ピーター君がかけで行くと、チツブマンクもみんな穴のお家にはいりました。（ハリーエト・パン女史の作による）